
俺の平和を返せ！！

篠崎 海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の平和を返せ！！

【Nコード】

N1226BA

【作者名】

篠崎 海斗

【あらすじ】

戦後、人々は平和ボケという状態に陥ってしまった。

そんな中、周りの変わった人々によって、平和を奪われてしまった残念な少年の残念な少年による残念な小念のためのコメディ小説

プロローグ

「今日も暇だあ。平和ってやだなあ。戦争じみたことがしたい」

「俺も同感だ。戦争っていいよね。スリルがあつて、勉強なんてしなくていいし、学校だつて行かなくてもいい。社会が混乱している状態だから、法律になんか従わなくていいもんねえ」

「平和って不便だな」

俺は通学中にそういう会話を聞いた。

社会の授業で、先生が平和について語っていた。

「君たち、平和ボケと言う言葉を知っているかね？我々は”平和”というものを求めすぎていて、ゆとりがついてしまっている。ゆとりがついたせいで、本来あるべきのものが失われたり、物が粗末に扱われたり、命の大切さを知らない人たちが現れてきている。”平和”とはいいいこととよく言われるが、本当にそうだろうか？むしろ”平和”を味わいすぎたために、我々は、視野が狭くなっていつているのではないか？私は”平和”というものは、一種の薬物だと考える。一度中毒になってしまえば、人間をどん底まで陥れる危険なものだ。いやない。平和なんてこの世にいやない！！」

(こいつらは何を言っているんだ？平和が一番だ。そんなに平和がいやないと言うのなら、頼むから……………)

「頼むから俺の平和を返せ！！」

プロローグ（後書き）

作成中の小説にギャグを載せることをあきらめたので、こっちに載せませす。コメディ―小説は、前々から書きたかったので、想像以上のできになってくれればうれしいです。

あまり面白くないかもしれません。そしてまだ書き始めて間もないので、文章力とかも未熟ですが、頑張ります。期待してください。さい。

今まで偉人と呼べる人が汗水たらして発見して来た数に関する教科だ。名づけて

俺の名前は、加治湊^{かじみなと}。平和な日常を取り戻したい高校二年生だ。なぜだか知らないが、俺の周りにはへんなヤツがいっぱいいる。

その日は、二年生になりたての日だった。

「おーい、湊ー！！」

へんなヤツの一人が来た。彼の名前は、神無月健太^{かんなつきけんた}、中学からの中だが、こいつは本当にバカだ。

「社会の先生久しぶりにまじめに語っていたな。授業つぶれてうれしーぜ」

こいつは一見すると、平凡な高校生のような言動をするのだが、かなりのバカである

「お前頭いいじゃん。だからさあ教えてもらいたい問題があるんだけどいいかな？」

「今日は何についてだい？」

「科目は、今まで偉人と呼べる人が汗水たらして発見して来た数に関する教科だ。名づけて……」

「算数ね。何が分からないんだい？ 定規の使い方かい？ 測りたい長さに合わせて、目盛りを読むだけ。簡単だろ？ 他に直線を引くという応用もできるから凄く便利だ。一度つかってみるといいよ」

「待て待て待て。お前、長年付き合っていて俺のことをぜんぜん知

らないんだな？俺が知りたいのは、三角定規と言う、定規が派生したものについてだ。アレは先が尖っていて、危ないけど、一体何に使うんだ？」

重ね重ねですまないがもう一度言おう。こいつはかなりのバカである。

「そうかあ。定規のことを知っていたのか。すまない。勘違いしていたよ。三角定規と言うものはね、先の角度が、30度、60度、90度というやつと、45度、90度、45度というやつとの2種類があつて、長さを測るということ意外に、角度を測ると言うこともできる便利な道具だよ。」

「便利な道具！？だったらそれは、あの青い狸のポケットから出てきたのか？」

「そうだね。また、少し工夫をすることで、平行線という線が引けるようになるんだよ」

「わかった。ありがとう。そんな使い方があつたなんて知らなかったよ。これでテストで点が取れる。ヤッホーイ！！！」

そういうと彼は、帰って行った。

「さてと、バカの処理も終わったし、そろそろ移動するか」次の授業は教室を変えなければならなかった。教室をでるということは、俺にとって命がけなことである。なぜなら……

外の世界には、他のクラスの刺客たちが待ち構えているからである。

教室を出た瞬間、俺の鳩尾みぞおちに衝撃が走った。ボールが当たったのである。

廊下で、紙のボールを使って野球やサッカー、アイスホッケーをするというのは聞いたことがあるが、まさか、廊下で砲丸投げとは……しかも本物の砲丸……まったく、この学園は未知な出来事であふれている。

「こいつらは一体何で飛距離を測っているんだ？」俺は床を見た。

するとそこには、おびただしい数の三角定規が置いてあった。

「オッス！オラ湊！うっひょー、世の中にはいつぺえ可笑しい馬鹿がいるなあ。わくわくすっぞー！」

こうして俺の、高校二年生の生活は始まった。

今まで偉人と呼べる人が汗水たらして発見して来た数に関する教科だ。名づけて
とりあえず出だしです。

次の話で登場人物をいっぱい出して面白くしていこうと思っています。
す。

新聞部の活動日誌

この学園は、クラブ強制参加制をとっている。その制度が、俺の平和を奪っていつている。

俺は、一番楽だと思った新聞部に入部したが、この学園の新聞部は、カオスだった。

放課後、俺は神無月かんなつきと部室棟の前で待ち合わせしていた。俺と神無月は同じ新聞部の部員だ。

「遅えよ。10分ぐらい待ってたぞ!!」

「奇遇だな。俺も今来たところだ」このバカと話を噛み合わせたら、終わりだ。俺はわざと、話の内容をそらした。

「じゃあ、行くか。」部室棟の中には、新聞部の部室はない。なんでそこで待ち合わせしたかというと、新聞部の部室に行くには、俺らみたいなカスの場合、最低でも二人のパーティーが必要だからだ。俺と神無月は、部室棟の2階上がり、一番奥の部屋のインターホンを、2回鳴らした。これが新聞部の部室棟への入り方だ。

ーピンポーンピンポーンー

その音が空の部屋に鳴り響いた瞬間、俺と神無月は、ワープしていた。廃れた部室棟の前に。

部室棟の中には、部屋が5部屋、横に並んであった。このうちの1つが新聞部の部室なのだが、日に日に場所が変わるので、部員の俺らにもどれが正解か分からない。

「どれから行く？俺は右から2つの部屋を推薦する」と神無月。

「じゃあ俺は、左から2つめ」俺と神無月の意見は、かみ合わない。いつも真逆の選択をしている。

「間を取って、真ん中の部屋で」俺は、いつもこうして意見をまとめている。間を取って決めた場合、常に真ん中の部屋になるのだが、それもしかたないことだ。

「わかった。せえーので開けるぞ」

「せえーの！！」

ドアを開けた。そこには、口からはみ出した牙、にらまれただけですくんでしまう鋭い目、人5人分ぐらいの大きな体、その体とほぼ同じぐらいの長さの尻尾、肩甲骨から生えた一对の翼。

間違いない。これは伝説でよく語られている想像上の生き物、ドラゴンだ！！

「なんでこんなところにこんながいるんだよ！！」

「焦るな！逃げるぞ！」

「どこに？どうやって？おい見ろよ！ドラゴンが一步一步俺たちに近づいてきているぞ！もうおしまいだ。ママーー」神無月はパニック状態に陥っている。

「お前は、映画でピンチになった時のス○オか！！落ち着け、この速度なら逃げれるぞ！」

「そ、そうだな。じゃあ逃げるぞ！！（お前を囿おとじにして）！！」

「ちよつと待て！今なんて言った！ふざけんな！！お前が囿おとじになれ！！」

「お前の屍を越えてやんよ！だからお前が囿おとじになれ！」

「俺の屍を越えるだと？甘いな。トラップカード発動！！」 B E

A 生贄いけにえ”！！このカードは、ピンチになったときに発動することができる。神無月健太一体を生贄いけにえにして、加治湊の人生を長引かせる！！」

「だったらこっちは、トラップ！」生贄封じの花瓶”を使わせてももらう！このカードがフィールドに存在するかぎり、神無月健太は一切の生贄いけにえ、囿おとじの対象にされない。また、もしされそうになった場合は、無条件で加治湊を永久にこの世から除外することができる！除外される！」

「いい度胸じゃねえか！お前がその気なら、こっちも本気出すぞ！！」

無駄なやり取りをしている間にも、ドラゴンは一步一步俺たちに近づいてきている。

「やっべえ！どんどん近づいてきているぞ！ジャンケンしよう。負けたほうが囿おとじになる。もちろんあと出しはなしだ」俺はそう提案をした。

「わかった。俺はグーを出す。だからお前はパーを出せ！」

(ほう、心理戦で来たか。だが甘いな。俺は何回この心理戦法に勝ってきたか。経験の勝利だ。)

「最初はグー！」いま、命がけの決闘ジャンケンが始まった。

「ジャン……」甘いな。後出しはなしとは言ったが、先出しなしと
いうことは、言ってない。

「ポン！！」俺は、「ケン」と言う前にパーを出した。へっ、愚かな、神無月はこの戦法を知らずにグーを出してやんの。

「せこいぞー！」

「言いがかりはやめてくれないか、囃君。俺は、後出しはなしと言
ったが、先出しなしとはいっていないだろ？」

「だが普通なしだろー！！」

「なにを言ってるんだい？君もちゃんと予告どおりのグーを出して
いるじゃないか。ちゃんと理に適っている」

「み、湊……お前は！」

「神無月君、君はいい友であった」

「騙したなー！！！」

「では俺は逃げさせてもらつとするよ」

「くっそ！こつなつたら仕方ない！！」

「つつかもうぜー!!ドラゴンオール!!」そう言つと神無月は、ドラゴンの下に潜りこみ、思いっきり下腹部を握りつかんだ。

と同時に、この世のものではないような奇声をドラゴンが放った。そしてドラゴンはそのまま仰向けに倒れた。

「おそらくお前は下敷きになって死んだだろう。残念だ。しかし安心しろ!お前の分まで俺が新聞部の部室にたどり着いてやる」俺は両手をあわせ、合掌をしてその場を立ち去ろうとした。すると……

「勝手に殺すな!助ける!」神無月は生きていたようだ。ドラゴンの下に僅かな空間が開かれてあつた。そこに逃げ込んだのだろう。

「あらヤダ幻聴」
そう言つて、俺はその場を足早に立ち去つた。

それからさつきの廃れた部室棟の前に行き、左端から全ての部屋を調べていった。

一番左の部屋には、大鍋地獄。左から二番目の部屋には、まきびし地獄。右から二番目の部屋には、ジャングル。といった具合にそれぞれ罫が仕掛けられていた。

そして一番右のドアを開けたとき、そこには、新聞部の部室が存在した。

「23分53秒。遅ーい!」そこにいた少女がストップウォッチを片手にそう告げた。彼女は、早乙女美音子、新聞部の副部長であり、俺の天敵だ。見かけはとてもかわいらしいロリ顔、ツインテールだが、中身は冷血な鬼の血をひいている。

「あの。そろそろこの意味分らないファンタジーな部室への行き方変えませんか？おかげで一人死にましたし……」

「用心のためよ、仕方ないでしょ」
「用心にも程がある。」

「ここまでする必要はないと思いますが……」

「ここまでつて？部長は、この試練を全部の部屋合わせて19秒でクリアするんだよ！あと20部屋増やしてもいいくらいじゃないの？」

「……………部長は超人離れしている。仕方ない……………」部屋
の奥には、すごく暗い感じの少年がいた。彼の名前は、石田正宗
(いしだまさむね)、高校三年生なのだが、その臆病さゆえに、美
音子と神無月からいつもひどい仕打ちを受けている。

そしてわが部最強の部長こと鎌田宗司先輩。かまたそうじ普段は調査のため部室
にいないが、俺の眼鏡を一瞬で破壊するぐらいの戦闘力を持っている。
俺も直接あったことがあるのは数回しかないが、学園内で破壊
神と恐れられていることは、何回も聞いたことがある。

「ところで神無月は？」鬼女こと早乙女美音子が俺に聞いてきた。
すっかり忘れていた。そんなやついたっけ？もしかして？

「ああ、あいつなら死にました。……………いい死に方でした。……………
すっ」

「だから勝手に殺すな！！てか見捨てたのお前だろ！！」

「チツ!!」

「今舌打ちしたな！俺の生還に対して舌打ちしたな！」

「言いがかりはやめてくれ。俺は、お前の生還がうれしいんだよー
バンザーイ（棒読み）」

「（棒読み）って何だ！心がこもってねえ！もう一回だ！」

「死ね。ウザイ。カス」

「そうだね。凄く心がこもっているよ。ありがとう。……………ぐすっ
……………凄く感動したよ。いろんな意味で……………」

そんなこんなでこの学園の新聞部という部活は、カオスである。

新聞部の活動日誌（後書き）

ちょっと危ない感じですが、伏せているので大丈夫だと思います（汗）。

しばらくの間、受験勉強に専念したいと思っているので、ひよっとすると更新できなくなるかもしれません。アクセス数で判断します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1226ba/>

俺の平和を返せ！！

2012年1月4日01時49分発行